

農林省農技研 日浅治枝子

1. 本研究については、すでに1, 2報において、農村婦人作業衣の一般的、ならびに地域別による変遷を報告し、3報は、農作業衣の一部を占めるかぶりもの類のうちの布製品について報告した。今回は、それ以外のかぶりもの、主として笠および帽子について報告する。

2. 昭和27年以降、現在に至る間、全国各地域において着用され、またかつて用いられていた各種の笠類の形態、構造、材質、地域差、変遷などについて実態調査を行なった。

3. 現在着用される笠類は、大別して縫い笠と組み笠及び編み笠に分けられる。縫い笠の材料は主として、萱、蒲などで、一般的にスゲ笠とよばれ、その分布は全国に及ぶ。現在主として関東から東北にかけて着用がみられる。組み笠は、檜材による檜笠が、中部山岳地帯、関東の一部地域において用いられている。編み笠は、主として藁、稲ワラで作られ、もっぱら日よけ用として、かつては全国に分布していたものである。しかしこれらの笠類も、第二次大戦から戦後にかけて急速に減少しはじめ、特に関東以西の平坦地帯にそれが顕著である。しかし東北地方では、従来の編み笠、縫い笠類が特殊な名称と共に現在なお用いられている。

これら笠類の減少の理由についてまず考えられることは、近代産業の発達による農村手工業の衰退と、ついで戦後における農家衣生活の洋服化に対応するものといえよう。